

最優秀賞

『遊郭文化について』

スーパー特進・文系クラス 村上 海音

江戸時代から、戦後に廃止されるまで、多くの賑わいを見せた遊郭。吉原をはじめとして、各地に点在した。周囲を堀や柵などが囲み、賑やかな市中から離れたところに置かれたため、独特のしきたりや文化が発展した。

そもそも遊郭という所は、客に対して歌や舞踊などを披露したり、客とともに遊んだりする遊女を雇っている遊女屋が集まる地域を指す。平安時代からあった施設ではあるが、正式に社会に認められるようになったのは江戸時代、幕府の出した都市政策によってであった。各地に設置することで、治安の維持を図ろうとしたという。有名などころで、江戸の吉原、京都の島原、その他、大阪や長崎などの特定の区域に設置され、戦後にGHQが公娼廃止制を出し、1958年に売春防止法が施行され、法的にその存在がなくなるまで多くの客を呼び込み、町人文化にも様々な影響を与えた。そこでは廓言葉という独特の言葉が使われた。「ありんす」という語尾や「あちき」や「わっち」といった1人称がその類である。遊女の大半は地方の貧しい家庭から連れてこられた女性であったため、田舎言葉を使わせないように用いた言葉だという。

遊女は花魁とも呼ばれる。これは、禿かむろという、仕事のお手伝いをする12才くらいまでの子どもが遊女のことを「おいらんとこの姉ちゃん」と呼んでいたことに由来するという。

遊女の中でも最高位の遊女を太夫たゆうというがこの太夫が凄い。茶道、華道、書道などの芸事は言うに及ばず、読み書き、計算にも優れていて、顔立ちもよく、正に才色兼備の完璧な人間であった。また、花魁は遊郭内をねり歩く「花魁道中」というものを決まった日に行っていた。この日は普段よりもいっそう美しく着飾り、道行く人を魅了した。そのきらびやかさに町娘たちは憧れ、自分たちの着物を仕立てる際には、太夫の着物の模様を参考に、自分たちで決めて仕立てるのが流行ったという。江戸の勝山太夫が結った日本髪は大流行し、現在も「勝山髷まげ」として存在している。このように、着物の模様や髪型など、江戸時代に大流行をもたらした花魁はまさに「時代のファッションリーダー」たる存在だといえる。

花魁や遊郭は、日本だけでなく海外にも人気があった。特にヨーロッパでは、明治時代に「江戸ブーム」がわき起こり、沢山の画家が浮世絵を模写したり、江戸の町並みを描いた。なかでも、ヴィンセント・ファン・ゴッホが、日本人の描いた遊郭の浮世絵を油絵で模写していたのには驚いた。間違いなく、遊郭及びその文化は、町人文化ばかりか、世界の芸術にも影響を与えている。

更に現在でも遊郭文化が残っているものがいくつかある。勝山髷とともに私たちの身近に残っている頭髪の結い方の1つ、「島田髷」がそれにあたる。静岡県島田宿にいた遊女がしていたものだという。この「島田髷」が派生して「文金高島田」というものになり、いまでも和製の髪型の定番として使われている。服飾系だと帯の結び方に「お太鼓」という基本形のものがあるが、これも遊郭の発祥だという。

そして、少し衝撃的なものもあった。「指きりげんまん嘘ついたら…」とロザミながら約束をしたことがある人は多いだろう。これは花魁が心を決めた男性に自分の小指を切って手渡し「これほどまでに貴方を想っているのです」という想いを示したことに由来している。とはいえ、実際に指を切った人は少なく、大半は造りものの小指を手渡していた。受け取る側もそれを分かった上で受けとっていたが、造りものであってもそれは相当な価値があったのだという。

しかしながら、現代の日本人において、遊女という職業を、現代にない職業であるがゆえに単に色を売るだけの仕事と捉えている人が多いのは残念に思う。最近、夏祭りなどで「花魁風浴衣」がよく見かけられるのも、このような認識が広がっている1つの証拠だと思われる。だらしなく肩を出し、着崩して歩いているのを見るにつけ、残念な気持ちになる。実際の花魁は肩など出さないし、着崩すなどもってのほかだ。何を着るのも自由なのかもしれないが、ならばせめて「花魁風浴衣」という名前だけでも変えて欲しい。加えて、ゲームや漫画などでそういった描写が強く描かれたりすることが多いのも、誤解の一因となる。だがこれまで述べたように、位の高い花魁は学も芸も習得せねばならない。軽々しく身を売る存在ではなかったのだ。また、現代と江戸時代の思考も少し異なり、色を売ることを毛嫌いしていた訳ではなく、むしろ受容的であった。これには時代の違いもあるため仕方ないのだが、遊郭文化には沢山の魅力があり、江戸時代の発展にも貢献し、現代文化にも跡を残していることを知ってほしい。

確かに、近代化が進むにつれ、外国の思想が入り、今まで普通であった遊郭をはじめとした色々な自国の伝統に対してもさまざまな考え方がされるようになってきた。それは良いことではあるのだが、ちゃんとした知識を持たずに偏見の目で見るのはあまり良いとは言えないだろう。自国の文化に対して理解を深めることは、とても重要なことなのだ。

(2095字)

世の中には数多くのキャラクターが存在している。有名どころで名を挙げると、サンエックスの「リラックマ」などがある。また、「くまモン」といったゆるキャラは全国に約 1500 体もいる。そんな中、2014 年にサンリオで商品化された「きりみちゃん」をご存知だろうか。名前の通り「切り身」なのだが、これが今一部の人の心をつかんでいる。私もその中のひとりだが、そんな「きりみちゃん」の魅力について調べていきたいと思う。

前にも述べた通り「きりみちゃん」は「切り身」で、サンリオ公式サイトによると性別は中性で初めて切り身になった日は 8 月 31 日（野菜の日）といった設定をもつ。

次はそんな「きりみちゃん」が誕生した経緯について述べたいと思う。サンリオは、20 代から 30 代向けのキャラクター開発のために 2013 年秋に「食べキャラ総選挙」を開催した。「食べキャラ」に設定された理由は、食べ物を真似たキャラクターは少なく誰にとっても身近で馴染み深い上に将来的に各企業とのコラボレーションが見込めるからであった。そして見事総選挙できりみちゃんは一位となり商品化された。発案したデザイナーは 20 代半ばの人物で、鮭好きの娘さんのために食卓に鮭の塩焼きをだしていたことがきっかけだったという。

調べていくうちにひとつ感じたことがある。それは、人々はキャラクターに対して「可愛さ」だけでなく、「独自性」も求めているかもしれないということだ。その例として、千葉県船橋市の非公認キャラクター「ふなっしー」を挙げたい。従来のキャラクターは激しい動きはせず、子ども達の夢を壊してしまうとのことから中の人は話してはいけないという暗黙の了解があった。だが「ふなっしー」はそれらを破ったことで独自性を生みだし、一躍有名なキャラクターとなった。このことから人々は、キャラクターに対して「可愛さ」だけでなく「独自性」をも求めていることが分かる。

ところで、なぜ日本ではこれほどまでキャラクターがヒットしているのだろうか。次はそのような時代背景を見ていきたい。情報社会が発達し、人間関係が希薄な現代においてキャラクターは私達に「癒し」や「やすらぎ」を与えてくれる。日本のキャラクターの大半は基本的には「無表情」である。無表情であることでキャラクターは人間に隣接したペットのような存在になる。そうなることで私達が普段思ったことや感じたことに同意してくれているのだと錯覚し、そこから私達は安心感を得る。この点からキャラクターは友人や家族の代替物になりつつあることが分かる。

次は「きりみちゃん」が商品化された 2014 年の経済状況から考えてみたいと思う。2012 年に始まったアベノミクスにより景気は徐々に右肩上がりになっていると実しやかに言われているが、世論調査を見る限りそれを実感している国民は少数だ。その上、2014 年 4 月には消費税が 5% から 8% に引き上げられた。これにより消費者の購買意欲は削がれ、アベノミクスに対し一層不信感がつるものとなった。政治や経済が不安定な今、それらに対する不安を解消する手段のひとつとしてキャラクターは多くの人々に求められているのだろう。

これから人々は、「癒し」を与え「不安」を解消し、かつ「独自性」を持ったキャラクターを必要としていることが分かる。そしてこの条件に当てはまるのが「きりみちゃん」なのだ。

そんな「きりみちゃん」は 2015 年に「おさかな食べよう大使」に就任し徐々に活躍の場を広げている。そして次に目指しているのは「健康な食生活の啓蒙」ということだ。肉中心の欧米食やレトルト食品といった加工食品にシフトしている現代に歯止めをかけるため、タニタ食堂とコラボしてイベントを開催するなど健康増進 PR に一翼を担っている。また、今現在サンリオでは、サンリオキャラクター大賞が開催されている。昨年は 11 位という結果に終わったが、中間発表が行われた現時点では 9 位となっている。これは「きりみちゃん」の地道な活動が実を結んだからだろう。

今後キャラクターは今よりも多彩になるだろう。そして今回ここで大きく取り上げられた「きりみちゃん」もいつかは廃れるかもしれない。それは私にとって寂しいことではあるが、「きりみちゃん」を上回る可愛くて奇抜なキャラクターに出会えることに少なからず期待している私もいる。そんな期待を持ちつつも、この先の「きりみちゃん」の活躍に注目していきたい。

(1816字)

今日の日本には、多くの「アイドル」と呼ばれる人たちが存在する。歌って踊って笑顔を振りまくことが仕事の彼らに心奪われる人は多く、そんな彼らにはまってしまって抜け出せない、という人たちもたくさんいる。私も現に、「嵐」というグループに心奪われて12年ほど経つが、一向に抜け出せる気がしない。そこで私が疑問に思ったのが、「どうして人は手が届かないとわかっているアイドルに貢ぐのか」ということであつた。相手はアイドル。ホストに貢ぐのとは、またワケが違う。どんなに貢いだところで会えるという確実な保証もなく、それでもただひたすら彼らに貢ぐ人々は、いったいどのような気持ちで貢いでいるのだろう。

アイドルに貢ぐ人々の呼び方はたくさんあるが、ここでは「ファン」と呼ぶことにしよう。この文章を書くにあたって、自分なりに貢ぐ理由を考えてみたところ、3つの理由があるのではないかと推測することができた。1つ目は「優越感」、2つ目は「安心感」、そして3つ目は「間接的に応援するため」である。

まず1つ目の「優越感」とは、CDや公式グッズを買ったりすることで、「私はCDを持っている」「私はあのグループの公式グッズを持っている」という優越感が自分の中に生まれる。アイドルに貢ぐことで、「私はその辺にいる一時的なファンとは違う」とアピールすることができる。

2つ目の「安心感」は「シングルの初回限定版」を例に出すとわかりやすい。「初回限定版」という言葉にめっきり弱いファンにとって初回限定版のCDは喉から手が出るほど欲しいものであり、なんとしても手に入れたいものである。これを手に入れたファンは、「手に入れることができた」というこの上ない安心感に包まれる。

そして3つ目の「間接的に応援するため」の理由は、ファンが貢ぐことによってそのアイドルの売り上げに貢献することができるので貢ぐ、というシンプルなものである。シングルやアルバムが発売された週の売り上げランキングに、自分が買ったCDの名前が上位にランクインしていると貢献した気持ちになるからである。

これらの予想を基に、私は自分の周りのアイドルに日々貢いでいる16～18歳の女性10人ほどに、簡単なアンケートを取った。「貢ぐ際、何に貢ぐか」「なぜ貢ぐのか」「貢いで後悔したことはあるか」「自分にとってアイドルとは」という4つの質問に回答してもらったところ、さまざまな意見が得られた。

「貢ぐ際、何に貢ぐか」という質問では、雑誌、DVD、チケットなどの解答が見受けられる中、やはり一番多かったのはCD、次に多かったのは公式グッズであつた。公式グッズは、公式サイトやライブ会場に行かなければ手に入らない場合が多いので、公式グッズはいわば「ファンの象徴」なのである。公式グッズを持っていれば、堂々とファンだと公言できるのである。

2つ目の「なぜ貢ぐのか」という質問は、①自慢したいから。②間接的に応援したいから。③自己満足。④買うと安心する。という4つの選択肢の中から自分に一番近いものを選んでもらった。1番多かったのは、②の間接的に応援したいから、2番目に多かったのは③の自己満足、であつた。中には選択肢があるにもかかわらず、「自分が貢いだお金がその人の装飾品になると思うと幸せだから」という珍解答を披露してくれた人もいた。このことから、ファンが貢ぐ理由の根底には、「貢ぐことでそのアイドルを応援したい」という気持ちがあることが判明した。

3つ目の「貢いで後悔したことはあるか」の質問には9割の人がないと答えた。しかし「グッズを買った後に大金を使い過ぎたと思うことがある」と回答した人がいた。これはファンならだれもが一度は思ったことがあるはずだ。だが、使い過ぎたとは思っても後悔はしない人が多いようだ。

そして最後の「自分にとってアイドルとは」という質問の解答で1番多かったのは「元気の源」であつたが、「心の支え」、「生きがい」など、情熱的な回答も数多くあつた。中には、「沼」とただ一言答えた人もいた。きっとはまって抜け出せないという意味だろう。

このアンケートからわかったことは、ファンにとってアイドルとは元気の源や心の支えだということだ。これこそ、ファンがアイドルに貢ぐ理由である。ファンはただ意味もなく貢いでいるのではなく、自分に元気を与えてくれる彼らに、売り上げに貢献するといった形で恩返しをしているのだ。

今回はアイドルファンを対象にしたが、アイドルではないグループのファンにも、同じことが言えるかもしれない。これからも日本には……いや、世界には、そんなアイドルにはまって抜け出せなくなり、貢ぐ人が増えていくことだろう。

現在の日本では、幼児教育について問題を抱えている。その原因として少子化があげられる。2014年の人口動態統計によると、1人当たりの女性が生涯に産む子供の数を推計した「合計特殊出生率」は9年ぶりにマイナスに転じた。さらに、もう1つ少子化と同じく重要なのが、待機児童の増加である。幼稚園に通っている子供の比率は年々下がり、保育園に行っている子供の比率は上がっている。その理由として、近年、1日中働く母親が増え、保育園を利用せざるを得ない状況へとようになってきているからである。また、幼児教育を充実させようとするれば、当然ながら費用がかかる。今の日本の幼児教育にかかる費用の私費負担率は、4割以上である。これは高校教育と比べても高いのだ。しかも、幼児の親は年齢的に生涯で最も収入の低い時期である。こうした多額な費用を負担しなければならないことは問題である。

私は、これまですべての親が自分の子供を幼稚園や保育園に預けるということが当たり前だと思っていた。だが、実際は費用を負担できない親や入ることができる幼稚園や保育園が不足しているなど、すべての子供が幼児教育を受けているというわけではなかったのだ。

そこで、この「保育園義務教育化」を検討してみたい。これは、幼稚園や保育園に通う3歳から5歳の幼児教育を義務化するということである。義務化とは言っても、すべての子供を週5日で通わせなければならないというわけではない。保護者によっては、週に1回や数時間だけの通園でもいいような柔軟な仕組みを考えている。また、義務化によって、各家庭の費用負担額も削減されるので、気軽に幼稚園や保育園に通わせることができるようになるだろう。

社会学者の古市憲寿氏は「5、6歳までに非認知能力を伸ばすことが非常に大事だと分かっており、その時期を幼稚園や保育園で過ごすことはとても大事です。」と言っている。この非認知能力というのは、IQなどのように数値で計れる能力ではなく、性格や精神的安定間など数値で表すことができない能力の総称である。この能力が高い子供ほど、将来成功する可能性が高いと言われているのである。私は、古市氏の意見を読んで、この非認知能力が幼い頃に育てられていれば、現在の日本で問題となっている犯罪年齢の低下が抑えられ、日本全体の治安もよくなり、経済的にもレベルが上がっていくだろうと思ひ、共感できると思った。

また、すでに世界ではこの保育園義務教育化を実施している国もある。例えば、フランスでは、3歳からの保育は無料で、子供の98%が保育園に通っている。また、イギリスでは、公立か私立かなどは問わず一定条件を満たしていれば、人数分の経費が政府から始終される仕組みがある。この幼児教育助成金制度は、少子化の日本も参考にすべきであると考える。

私はこの「保育園義務教育化」に賛成である。なぜなら、この義務化が実現すれば、費用の面で預けることができなかつた人たちも預けることができるようになり、全ての子供に質の高い幼児教育を受けさせることができるからである。しかし、一方でこの保育園義務教育化には課題もまだまだある、その1つは、幼稚園や保育園といった施設が不足していて、働く人材も不十分であるという課題だ。確かに、この課題が解決されないままこの義務化が実現すれば、働く人の負担は増大するだろう。保育士、幼稚園教諭の資格併有や質を高めるための研修が必要となってくる。そうなれば、自ずと働く人の人数は減り、義務化されたとしても現状の問題は解決されないだろう。この施設や人材不足を解決するためにも給与などの待遇改善などが必要なのである。

さらに、保育園義務教育化は子どもだけに利益があるわけではなく、その母親にも利益をもたらす。つまり、子供を幼稚園や保育園に預けることで母親自身にも時間の余裕ができ、育児をする母親を孤独にさせないという効果もあるのだ。

私は、働く母親や幼児教育を受ける子供が安心して楽しく過ごせるような保育園が理想的だと思う。そのためには、例えば、母親の携帯で子供の様子がいつでも分かるように園内の様子を映像で見られるようにしたり、体験型のイベントを増やすことで子供が自然と学ぶ力をつけることができるようにするなど、様々な工夫が必要となってくるだろう。

もしも、将来この保育園義務教育化が実現されたならば、子供の能力も上がり、犯罪率も下がり、日本全体の生活レベルも上がっていくだろう。さらに、日本の教育をよき方向へと導いてくれるはずだ。そうなれば、少子化や待機児童などで悩まされている現代社会を救うことができるかもしれない。(1895字)